

WilComm

For iSeries Ver.8.03 & WilComm 4

Training Manual Lesson-3

iSeries 設定の基礎

Manual No - TRN043 (Last Update 2005/5/16)

WilComm V8.03 & 4

© Copyright 2006



本解説書は、ウイルコム「**iSeries Ver8.03 & PC WilComm4**」を初めてお使いになるシステム管理者向けトレーニング・マニュアルです。

Lesson-3 では、iSeries 上の基本設定について解説しています。

(目的)

1. ウイルコムの基本動作、データ・フローを理解する。
2. ウイルコムのユーザー登録ができるようになる。(ウイルコムのセキュリティ機能を理解する)
3. サブスクライバーの役割を理解する。
4. スヘシフィック・コードの意味を理解する。
5. ウイルコム用のOUTQ作成ができるようになる。
6. ウイルコム用OUTQ監視が正常であることを確認できるようになる。

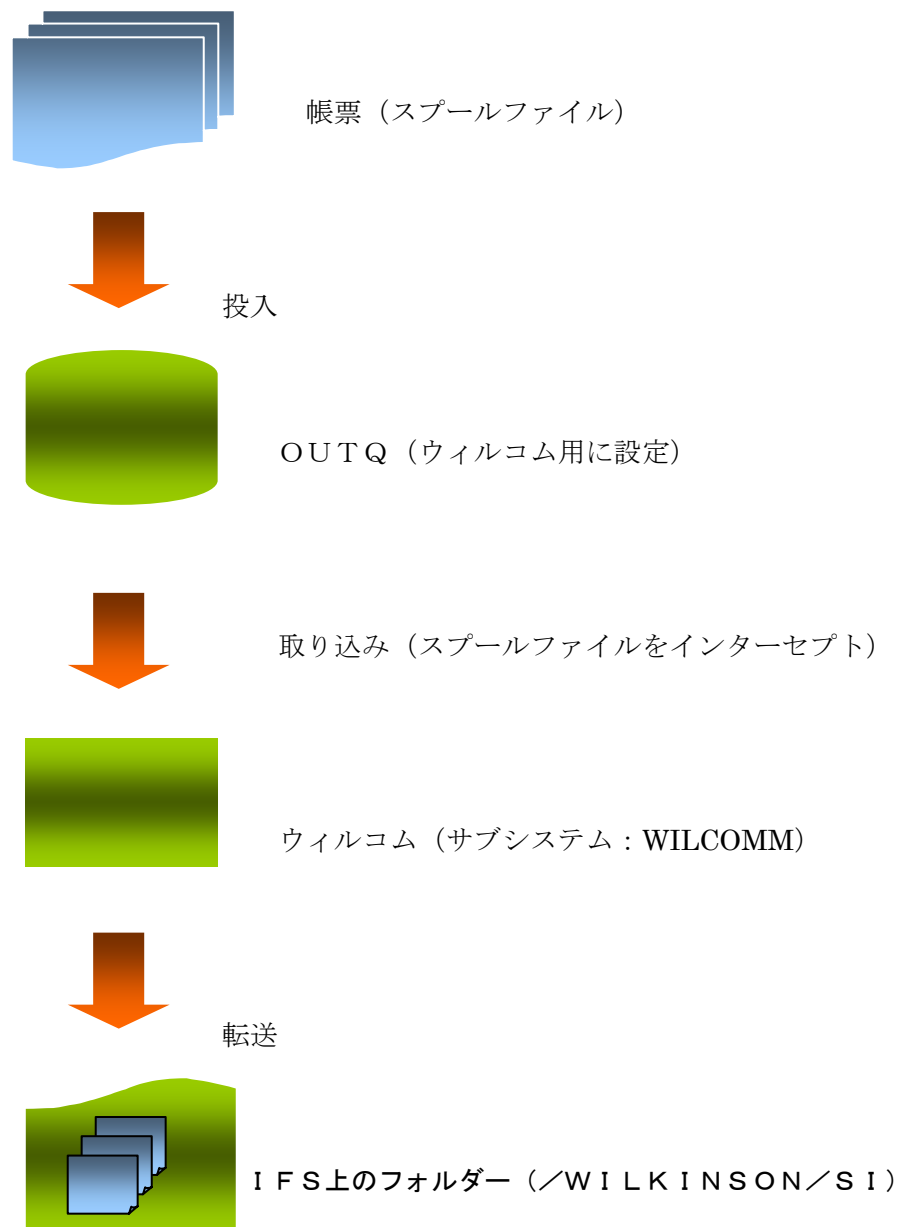
(目次)

1. ウイルコム処理概要.....	3
2. ウイルコム・ユーザー登録.....	5
3. ウイルコムOUTQの構成概念.....	10
4. サブスクライバー登録.....	11
5. 監視OUTQの作成 (ウイルコムOUTQ)	22
6. 監視OUTQ作成の確認.....	29
7. 監視OUTQの動作確認.....	32

[1. ウィルコム処理概要]

ウィルコムは、iSeries で作成された帳票を配信するためのシステムです。配信方法として、PC プリンター印刷、E-mail、FAX、ファイル保管を選択することが可能です。

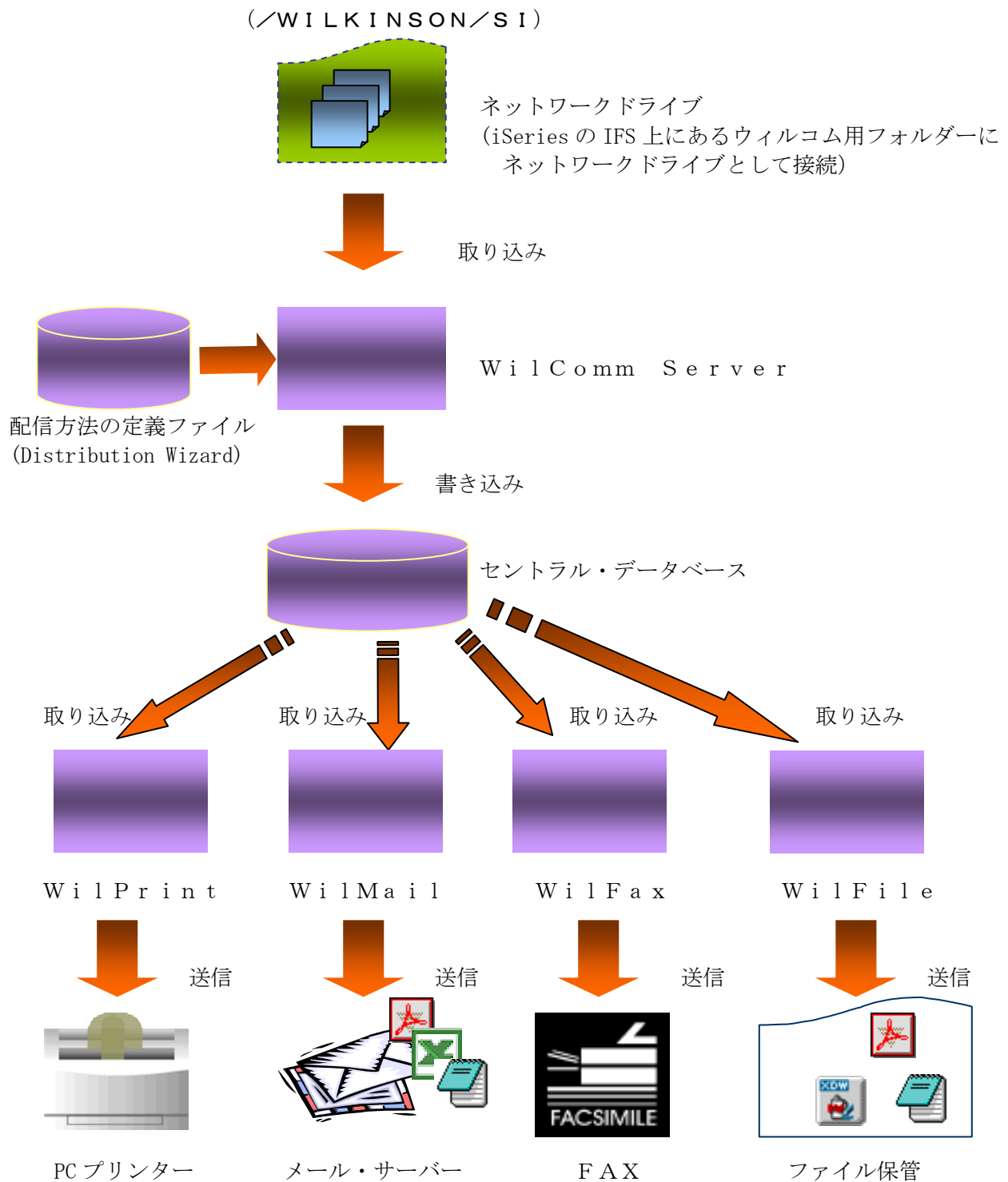
iSeries での送信処理



ウィルコムに監視対象として設定されたOUTQをサブシステム : WILCOMMが監視しています。OUTQにスプールファイルが投入されると、ウィルコムがスプールデータを取り込んでPCサーバーへ送るためのフォーマットに整形します。

整形されたデータは、iSeriesのIFS上にありますウィルコム用フォルダへコピーされ、この際にEBCDICからASCIIへのコード変換が行われます。

PC Server での送信処理



iSeries の IFS 上のウィルコム用フォルダーが PC サーバー側でネットワークドライブとして割り当てされています。

WilComm Server というプログラムが、常時このネットワークドライブを監視しています。

iSeries 側の処理でネットワークドライブにファイルが作成されると、これを PC サーバー側に取り込み、PC サーバー側に設定された配信方法を定義したファイルを検索し、条件が一致する定義があれば、これに基づいた配信処理手順がセントラル・データベースに書き込まれます。

WilPrint、WilMail、WilFax、WilFile の各プログラムは、セントラル・データベースを常時監視していて新しいデータが追加されると、それを取り込んで処理を行います。

[2. ウィルコム・ユーザー登録]

ウィルコムの管理画面の表示方法は、「QSECOFR」でサインオン画面よりログインし、コマンドラインで「GO W」と入力して実行キーを押してください。

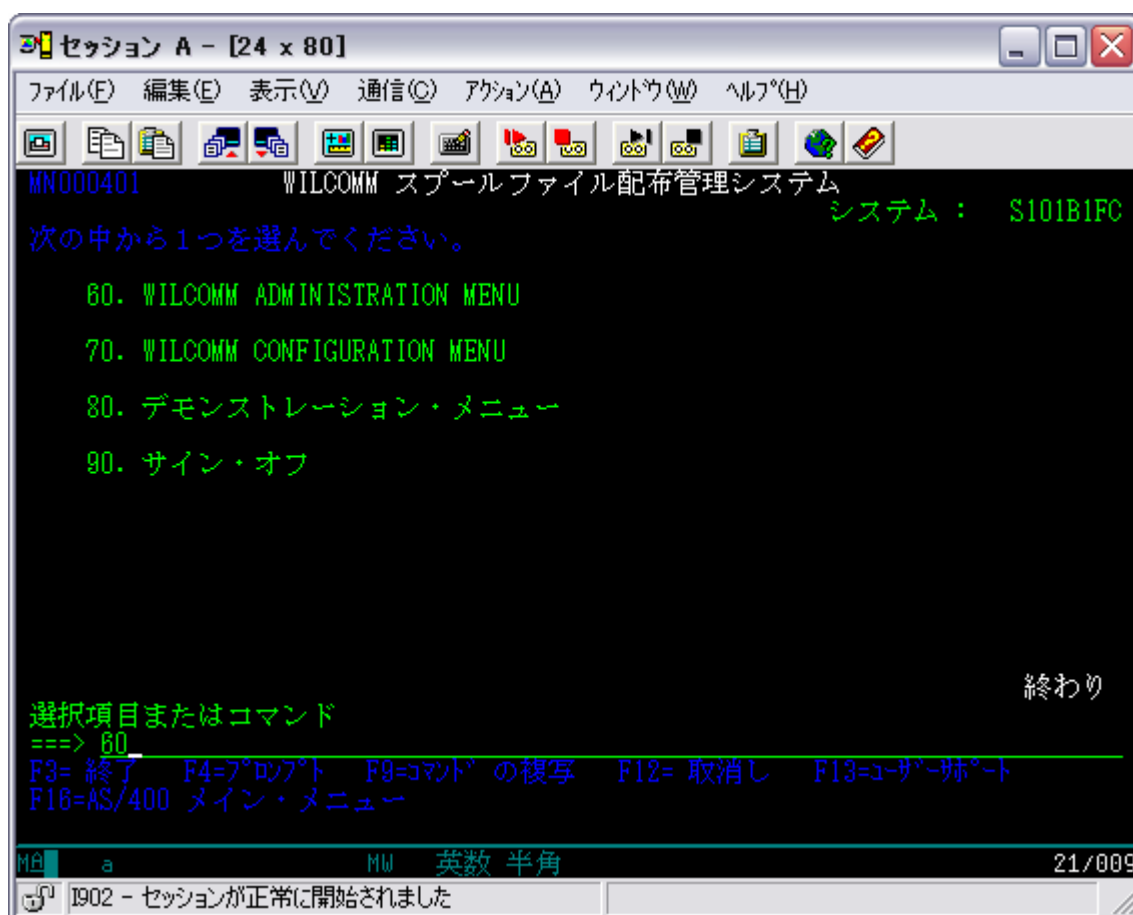
「WILCOMM スプールファイル配布管理システム」メニューが表示されます。

(以下、WILCOMM メインメニュー)

ウィルコムのオンライン機能を使用するユーザプロフィールの登録

ウィルコムのオンライン機能を使用するには、ユーザプロフィールをウィルコムの管理課に登録する必要があります。

Wilcomm メインメニューで次ページキーで以下の画面を表示し、「60.WILCOMM ADMINISTRATION MENU」を選択し実行キーを押します。



「12. ユーザー・プロファイル・メンテナンス」を選択します。



既に登録されているユーザープロファイルが表示されます。“QSECOFR”にオプション=3（コピー）を入力し実行キーを押します。



(注) ユーザープロファイル：QSECOFR 及び WILCOMM の削除/変更は行わないようにしてください。

新規に登録するユーザープロフィールを入力し実行キーを押します。



次の画面が表示されたら、ユーザプロフィールの登録は完了です。

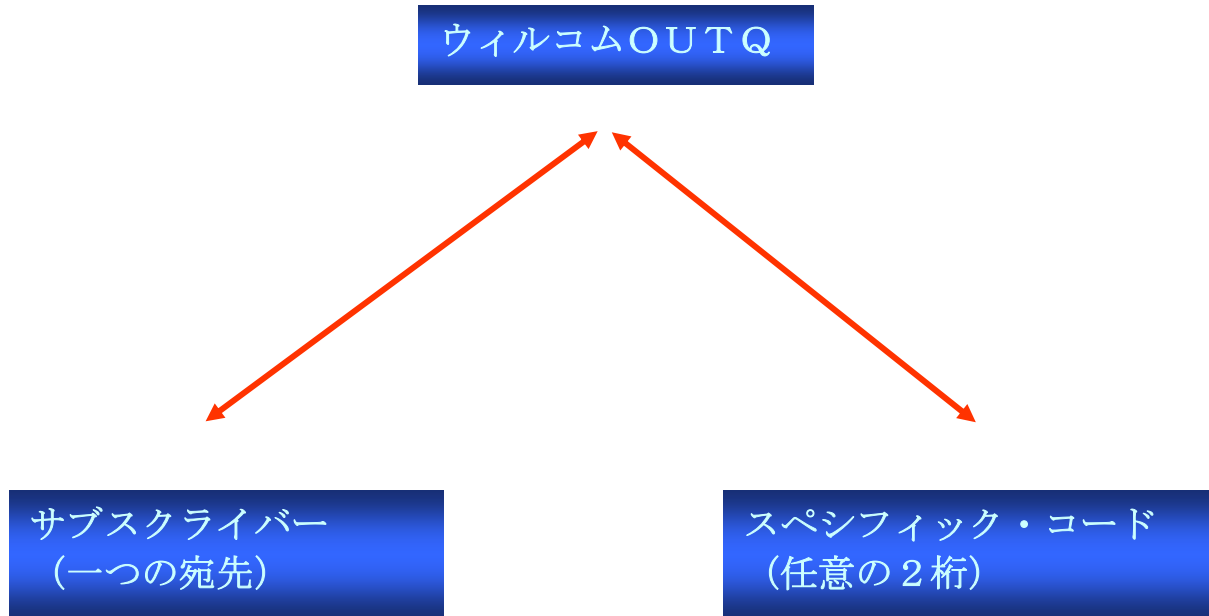


必要に応じて登録内容を修正します。該当ユーザープロファイルにカーソルを合わせて、オプション=1（全項目変更）で変更モード表示させます。



他のユーザープロファイルへの権限指定や、「GO WILCOMM/W」で表示されるメニューをユーザープロファイル単位に設定することが可能です。

[3. ウィルコムOUTQの構成概念]



ウィルコムOUTQは、図のようにサブスクライバー（一つの宛先）とスペシフィック・コード（任意の2桁コード）がリンクして作成、維持・管理されています。

コマンドラインから「CRTOUTQ」で作成されたOUTQはウィルコムの監視対象とはなりません。

図のように、ウィルコムOUTQには必ず一つの宛先（サブスクライバー）をリンクすることになりますが、作成するOUTQがリンクする宛先にしか配信できなということではありません。

ここでは、iSeries 上のウィルコムOUTQ作成のルールとして認識してください。

ウィルコムは配信の際の宛先を様々な方法で決定することができます。その中の一つの方法としてウィルコムOUTQにリンクしている宛先に配信する方法が選択できます。

ウィルコムの宛先決定方法は、他にスプールデータを読み取る方法やPCサーバー側のアドレス帳を使用する方法があります。

ウィルコムOUTQにリンクした宛先に配信する機能を使用しない場合、サブスクライバーの宛先をあまり意識する必要はないかも知れません。

あくまでも、ウィルコムOUTQを作成するために、ルールとして図のような関係があるということを認識していただければ、ここでは十分です。

（注-1）ウィルコムOUTQにiSeries専用プリンターを接続しないでください。スプールはウィルコムで処理される以前にプリンターに出力されてしまいます。

[4. サブスクライバー登録]

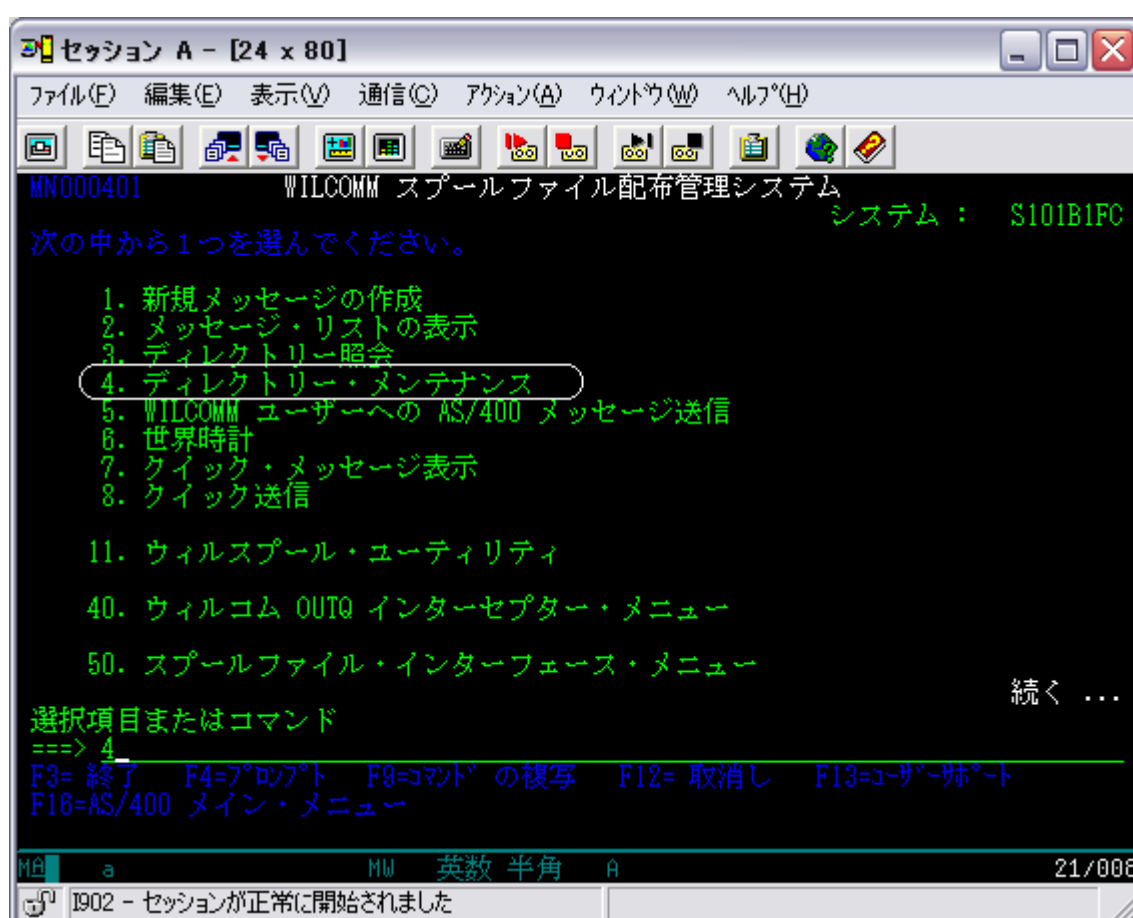
サブスクライバーとは...

送信方法と送信先アドレス等の情報を指定(保管)する宛先情報の事です。

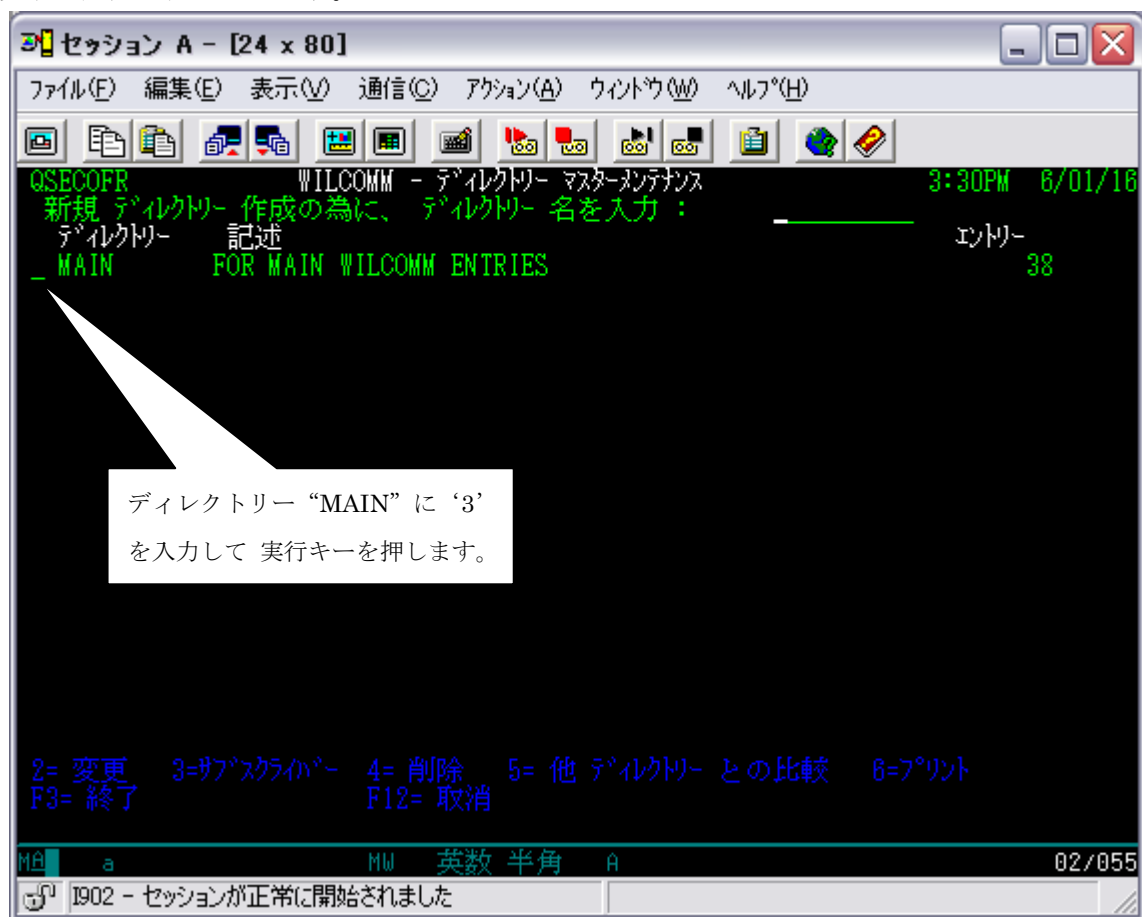
次のステップでウィルコムOUTQを作成する際に、OUTQとリンクさせるための宛先を登録してみましょう。

ウィルコムの管理画面の表示方法は、「QSECOFR」でサインオン画面よりログインし、コマンドラインで「GO W」と入力して実行キーを押して Wilcomm メインメニューを表示させます。

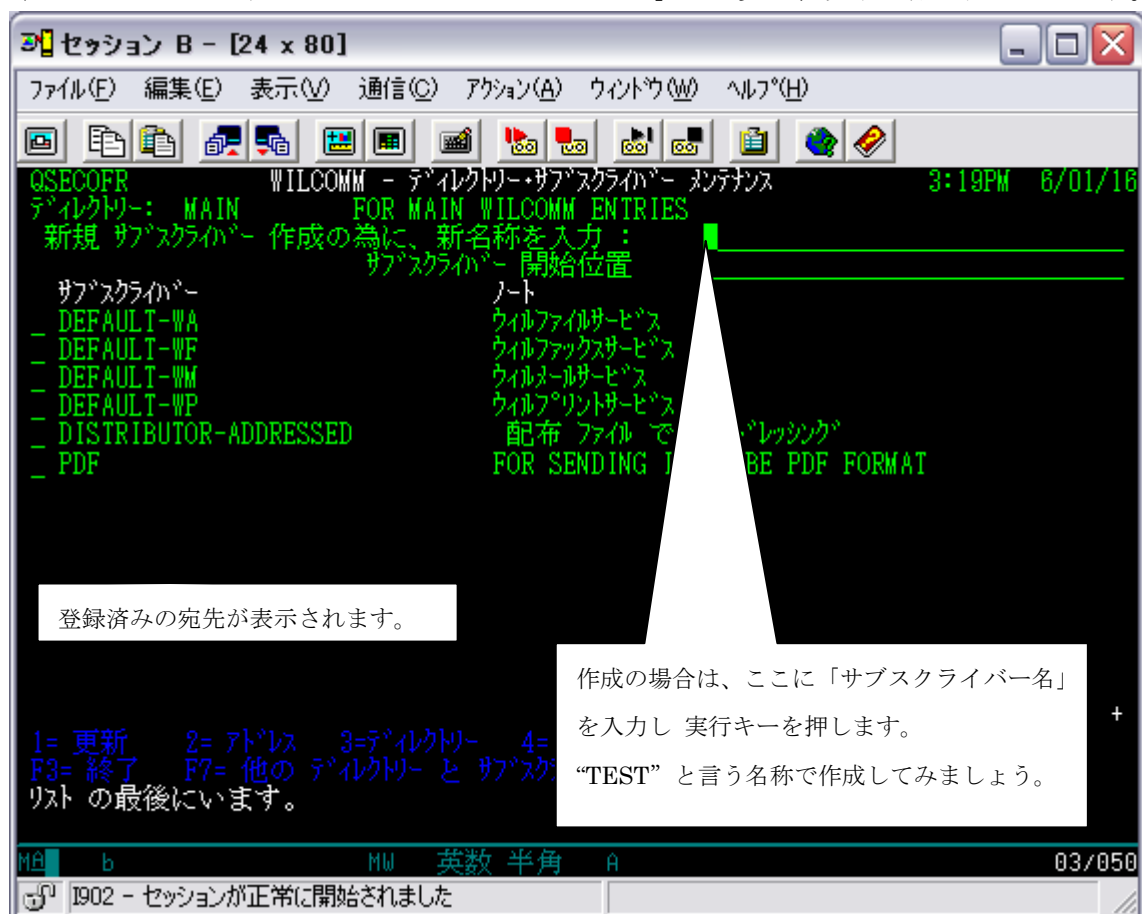
以下の画面から「4. ディレクトリー・メンテナンス」を選択し実行キーを押します。



以下の画面が表示されます。



ディレクトリーに登録されている「サブスライバー」の一覧が、以下の様に表示されます。



上記明細は、1行1宛先となります。

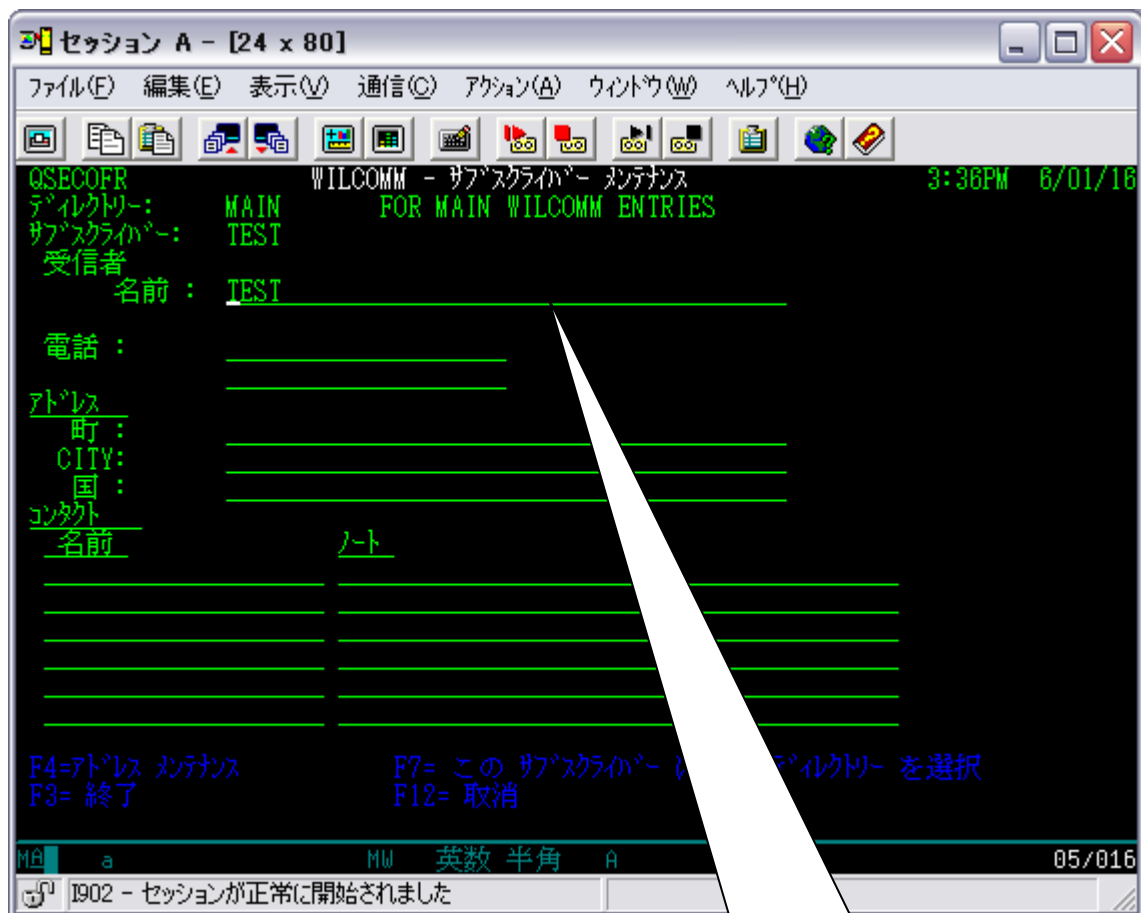
この一覧では、各宛先に登録されている宛先が「FAX 番号」なのか「E-Mail アドレス」なのか「プリンタ名」なのか「保管パス」なのかは解りません。

サブスライバーを登録する場合のサブスライバー名は、宛先の種類が解る命名規則をお勧めします。

(例) FAXxxxxxx / MAILxxxxxx / PRTxxxxxx / FILExxxxxx etc.

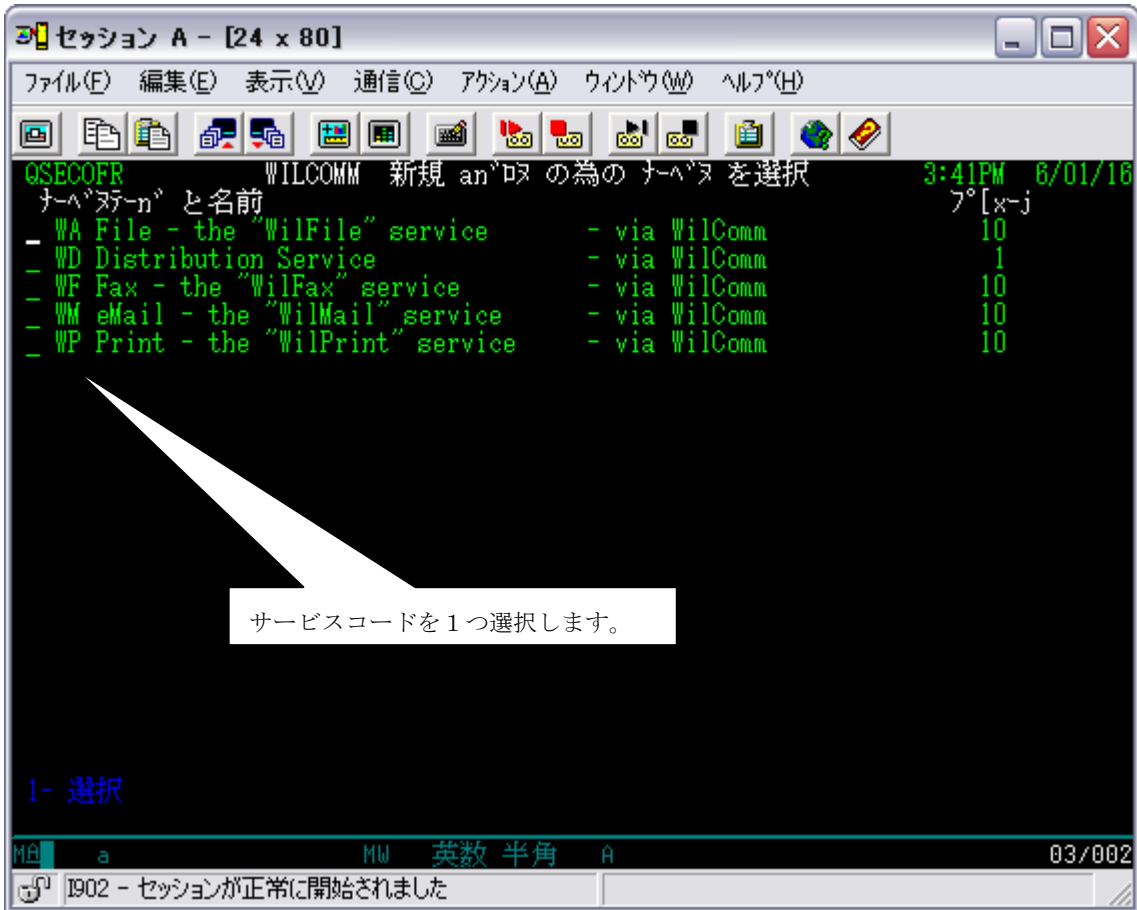
(注)「サブスライバー」名と「監視対象 OUTQ」(ウィルコムOUTQ) 名を同じ名称にして
おけば、管理しやすくなるかも知れません。

以下の画面が表示されます。



「サブスクライバー」を説明するコメント入力欄です。前画面での一覧表示における「ノート」部分ですので、宛先の種類やリンクさせようとしているOUTQ名等を入力しておけば、管理しやすいかも知れません。

サービスコード選択画面が表示されます。



サービスコードとは、登録しようとしている宛先の種類を区別するコードです。

ここで指定したサービスコードで次の宛先入力画面が異なってきます。該当するサービスコードにオプション=1を指定して実行キーを押します。

WD：複数の送信方法が混在しているような場合に指定します。

この場合、指定する宛先はありません。

WA：ファイル保管する場合に指定します。

次画面でファイル保管先パス入力画面が表示されます。

WF：FAXで送信する場合に指定します。

次画面でFAX番号入力画面が表示されます。

WM：Mailで送信する場合に指定します。

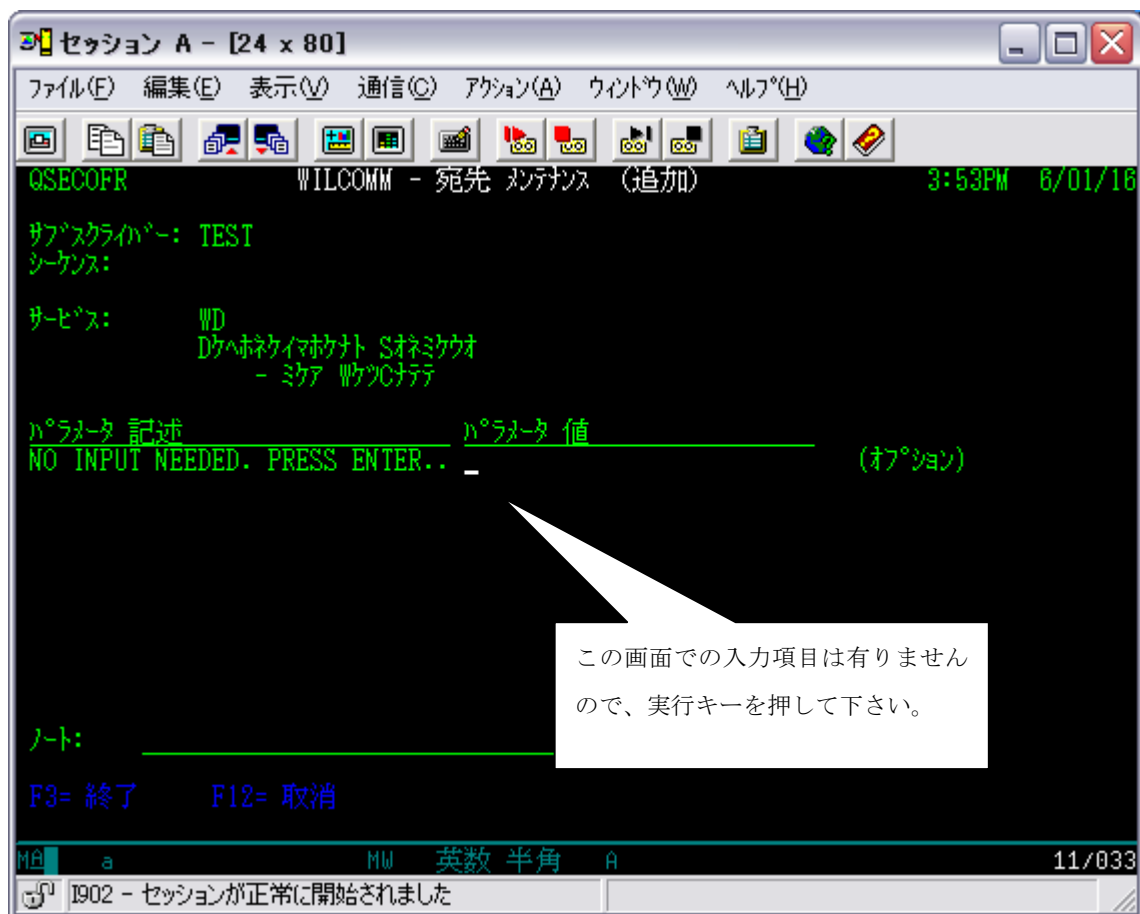
次画面でメールアドレス入力画面が表示されます。

WP：プリンターへ出力する場合に指定します。

次画面でプリンター名入力画面が表示されます。

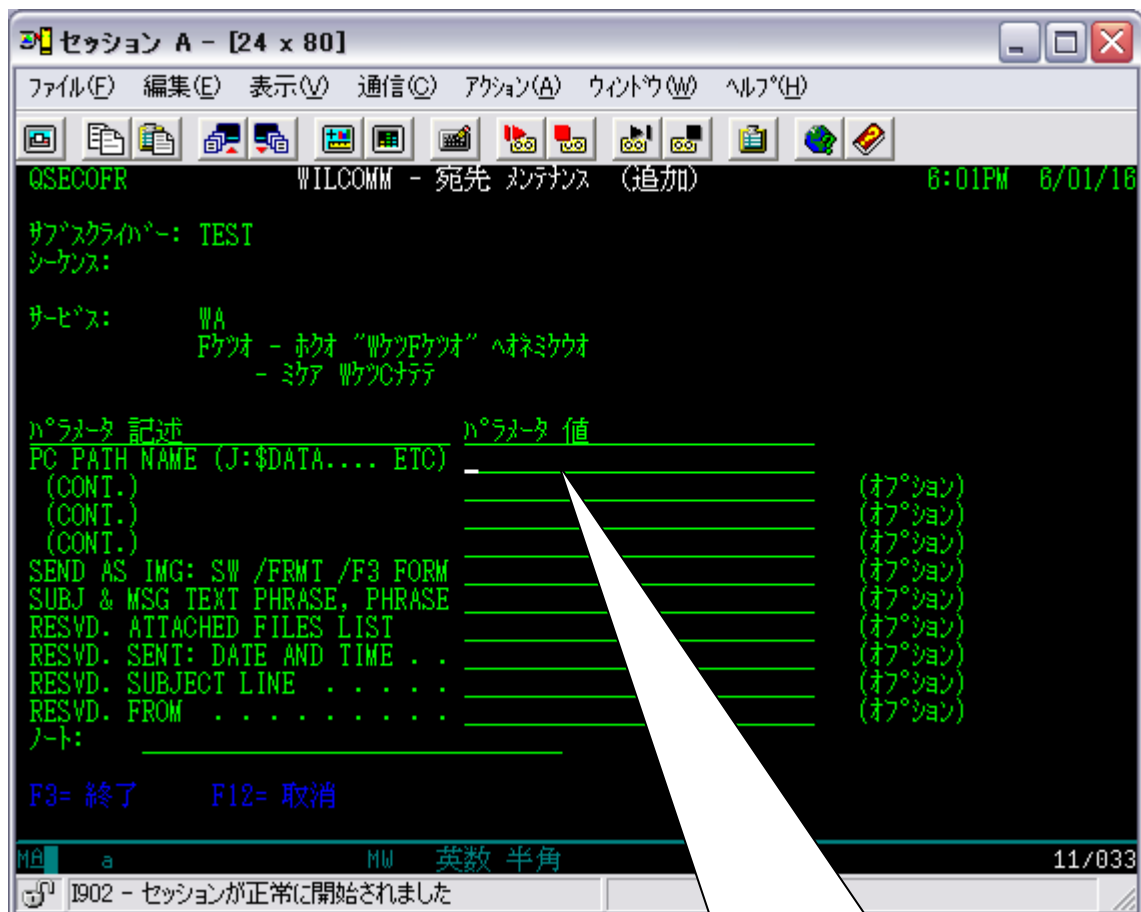
以下の画面が表示されます。

①前画面の選択項目“WD”（予定するOUTQで複数の配信方法が混在する場合）選択の場合。



半角文字の文字化けは英小文字ですので IBM 製エミュレータの場合、Ctrl + F3 で表示を切り替えてください。

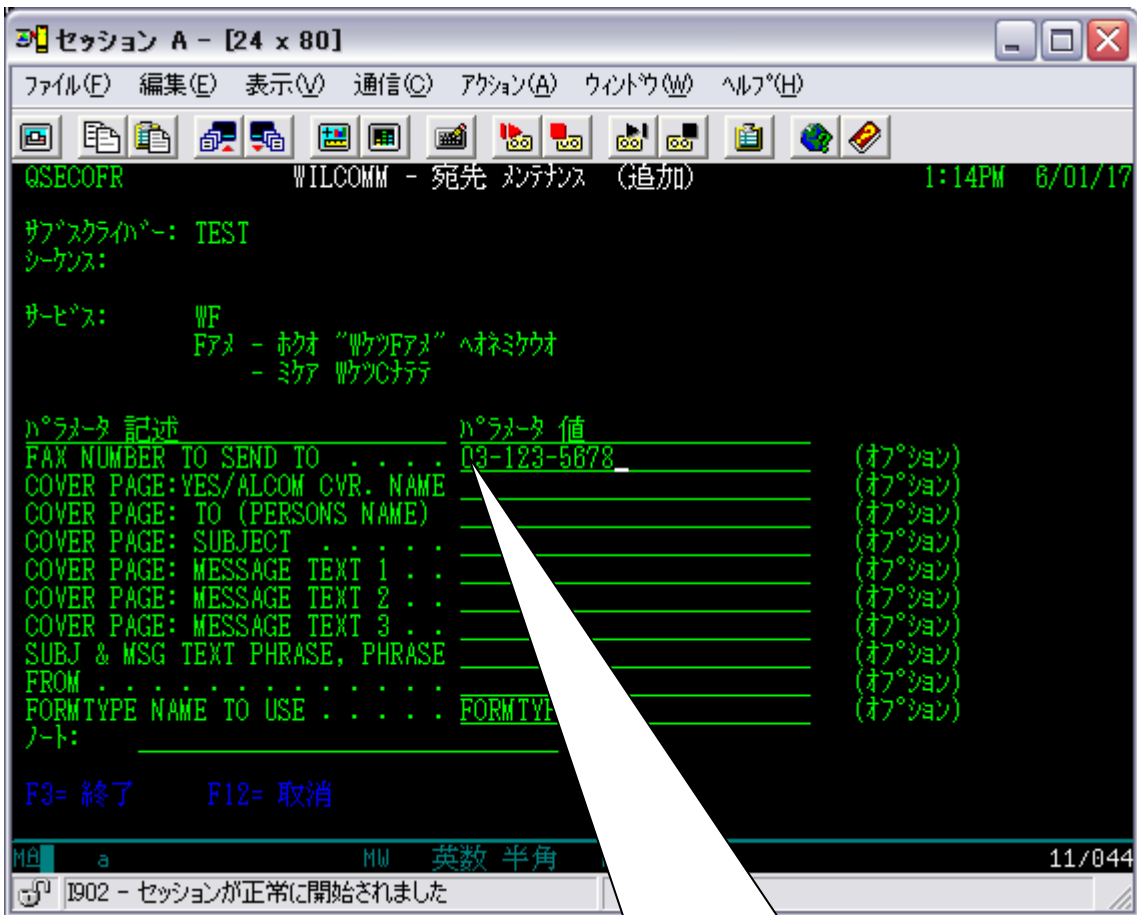
②前画面の選択項目“WA”（ファイル保管する場合）選択の場合。



PC PATH NAME にファイルの保管先となるパス名を入力
します。

半角文字の文字化けは英小文字ですので IBM 製エミュレータの場合、Ctrl + F3 で表示を切り替えてください。

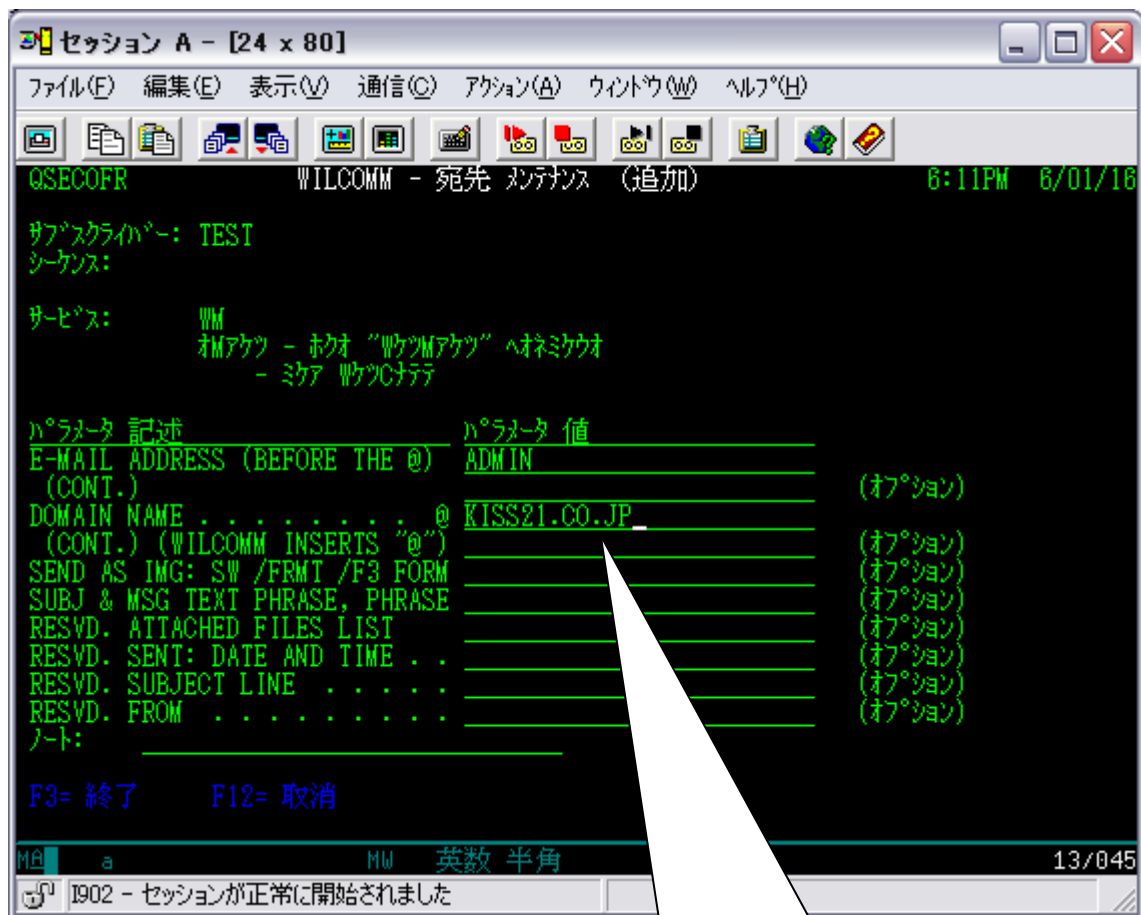
③前画面の選択項目“WF”（FAX 配信の場合）選択の場合。



FAX NUMBER TO SEND TO に送信先の FAX 番号を入力します。
FAX NUMBER TO SEND TO 欄以外、入力の必要ありません。

半角文字の文字化けは英小文字ですので IBM 製エミュレータの場合、Ctrl + F3 で表示を切り替えてください。

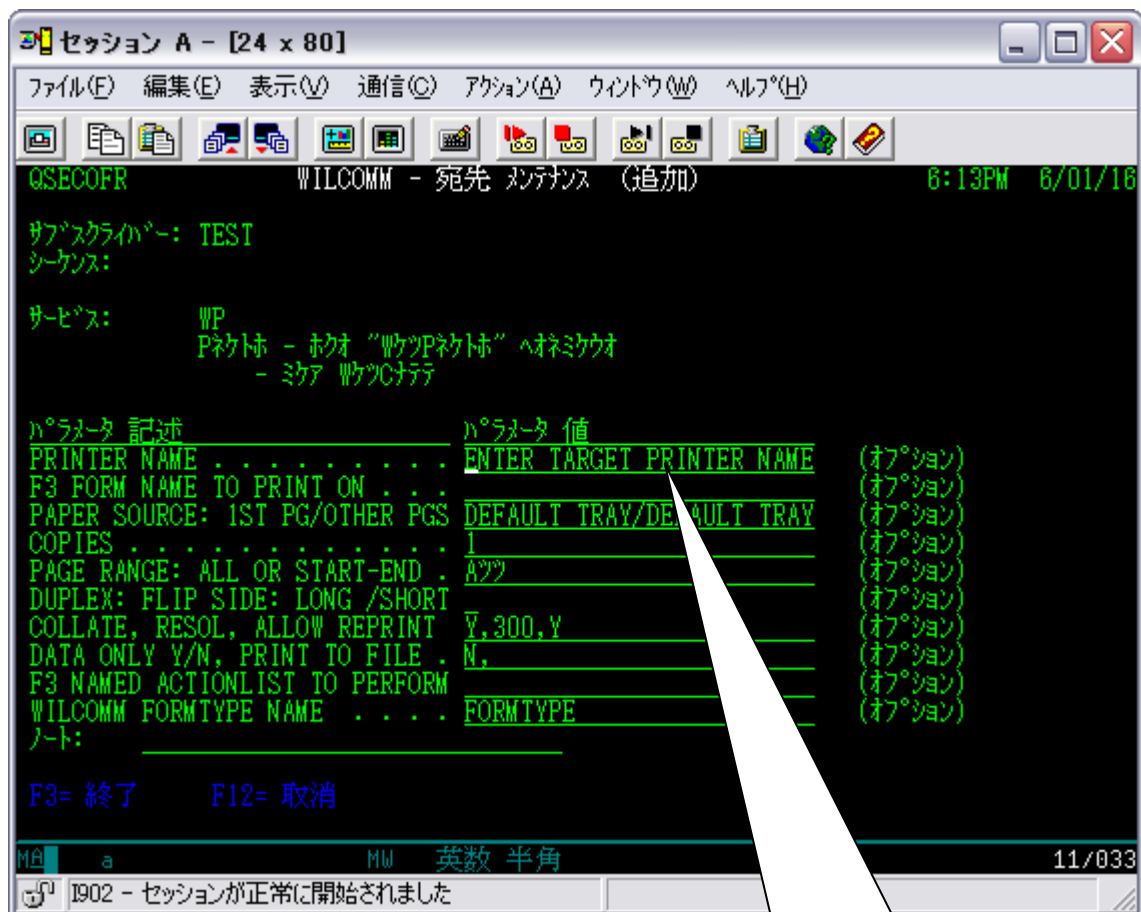
④前画面の選択項目“WM”(Mail 配信の場合) 選択の場合。



送信先のメールアドレスのアカウント部 (@マークの左側) を E-MAIL ADDRESS(BEFORE THE @)に、ドメイン部 (@マークの右側) を DOMAIN NAME に入力します。(画面入力例参考)

半角文字の文字化けは英小文字ですので IBM 製エミュレータの場合、Ctrl + F3 で表示を切り替えてください。

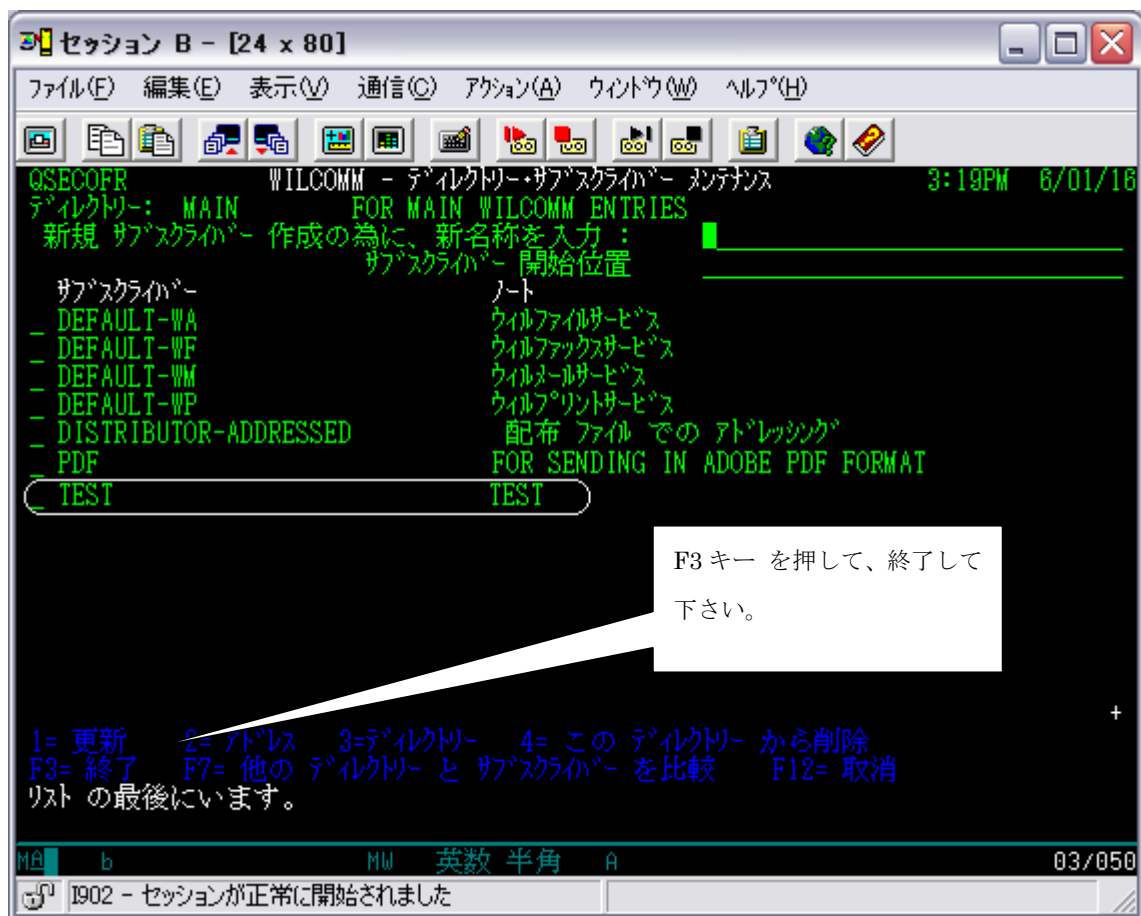
⑤前画面の選択項目“WP”（PCプリンター出力の場合）選択の場合。



プリンターの指定は PC サーバー側の設定で行なうため、ここは入力する必要がありません。

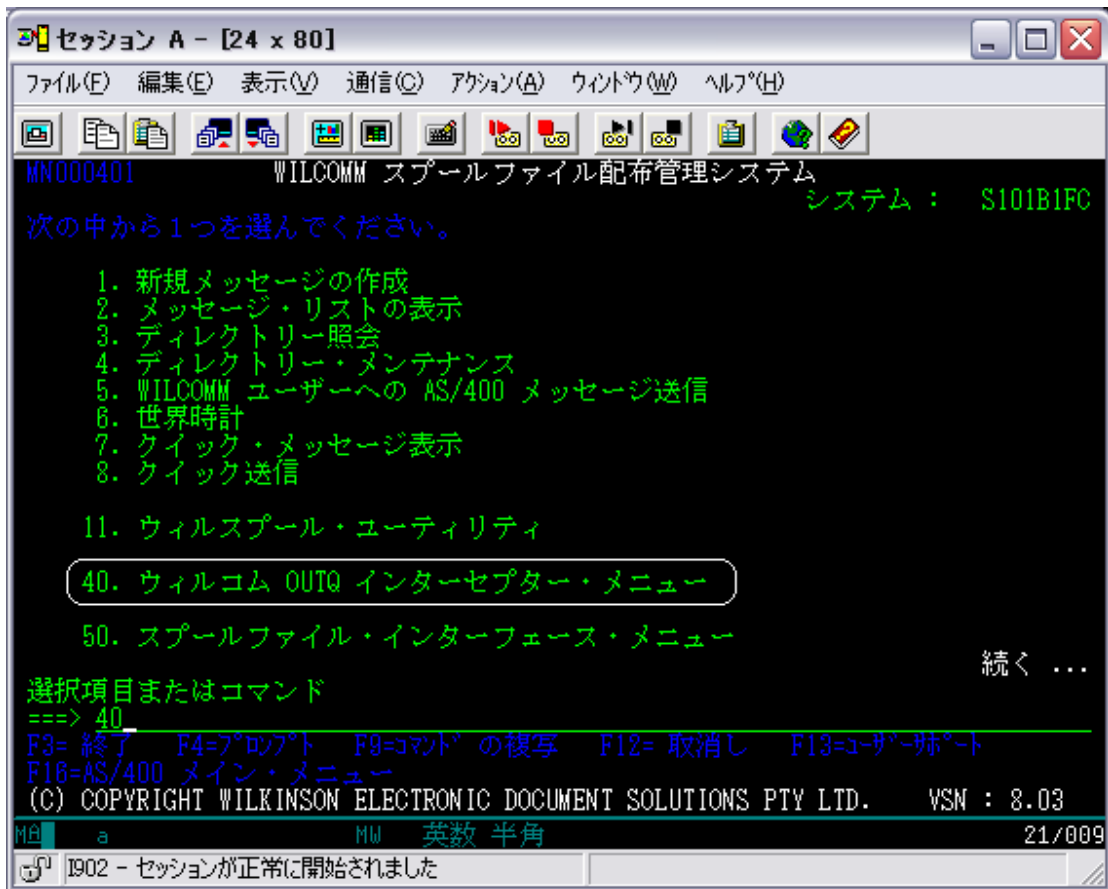
半角文字の文字化けは英小文字ですので IBM 製エミュレータの場合、Ctrl + F3 で表示を切り替えてください。

以下の画面が表示されたら、「サブスクライバー」の登録は完了です。

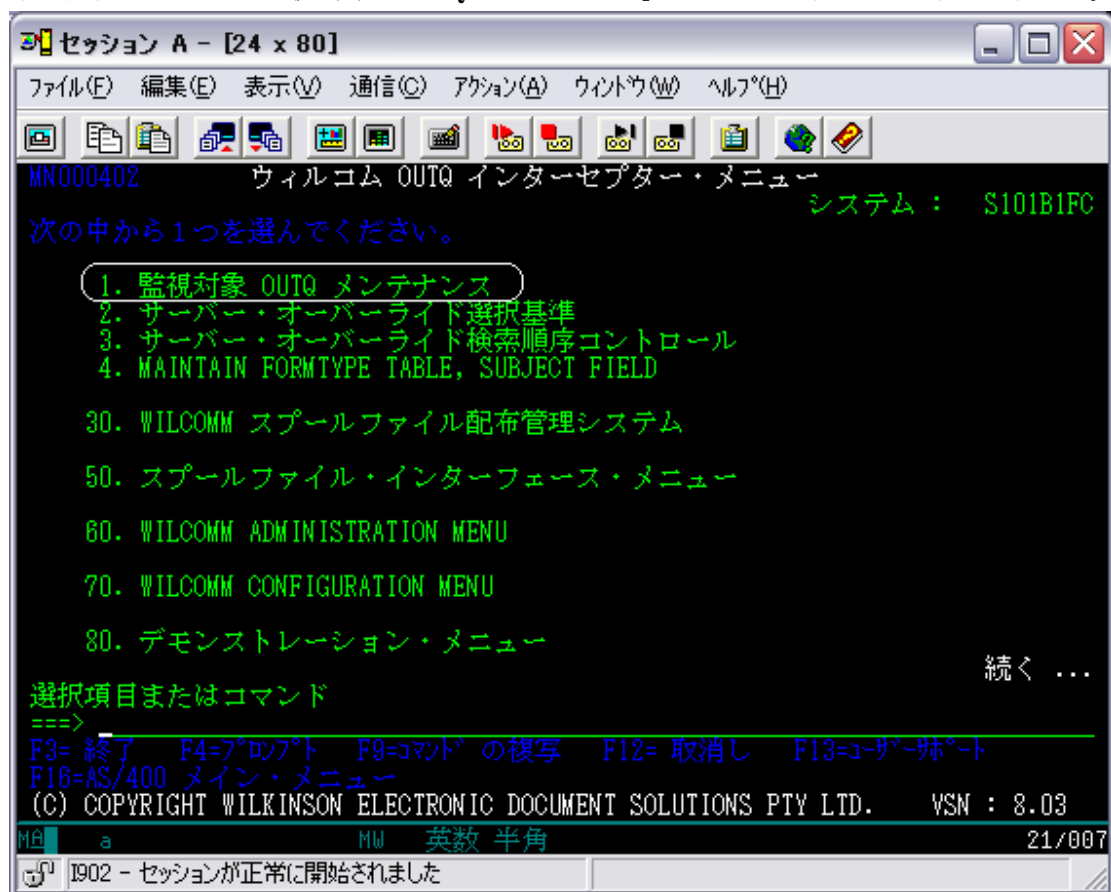


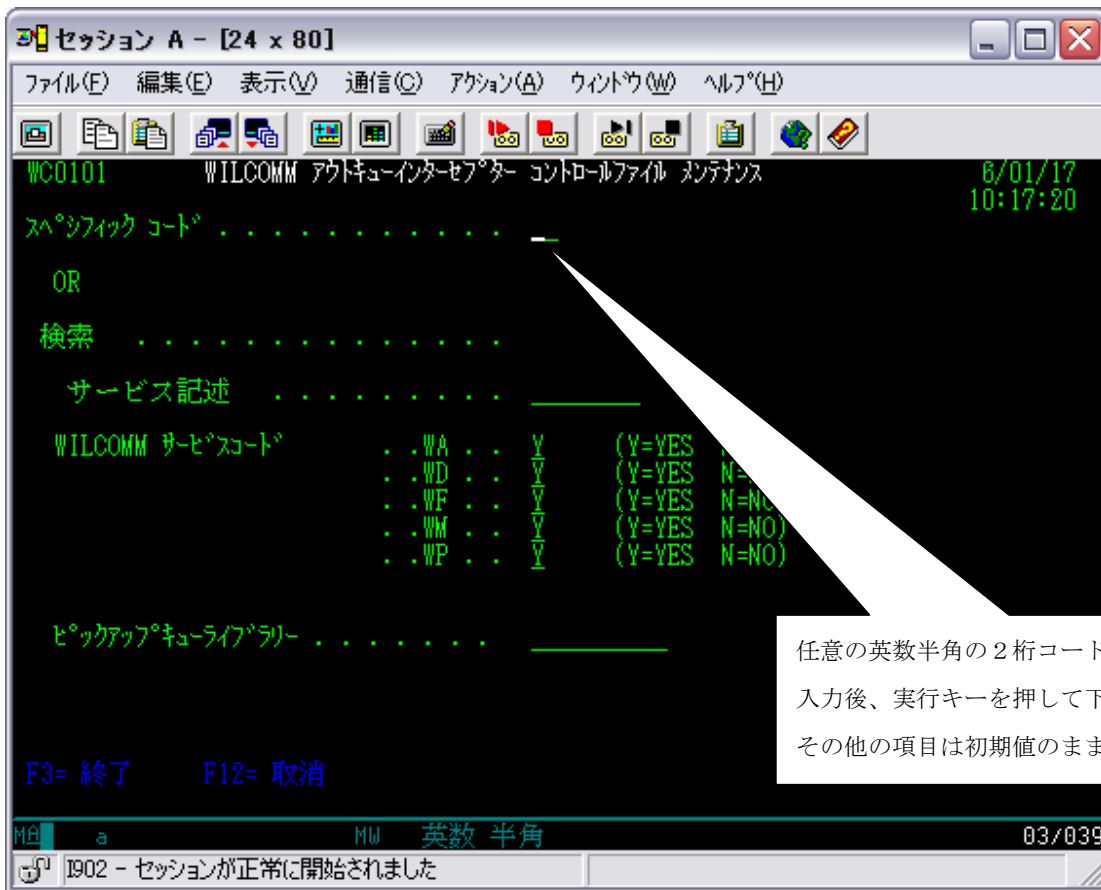
[5. 監視対象OUTQの作成]

Wilcomm メインメニューより、「40. ウィルコム OUTQ インターセプター・メニュー」を選択します。



以下の画面から「1. 監視対象 OUTQ メンテナンス」を選択し実行キーを押して下さい。



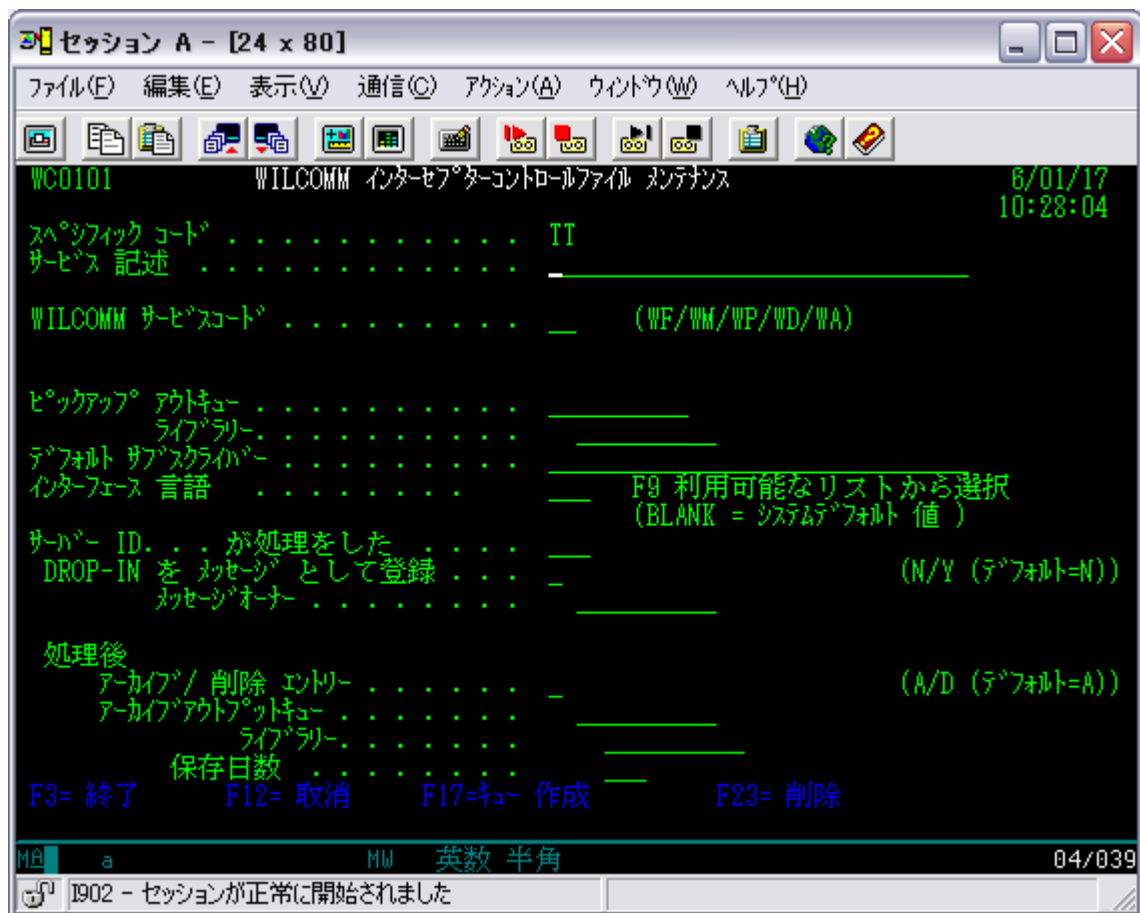


「サブスクリイバー」とこれから作成する「監視対象 OUTQ」とを1対1で関連付けるコードの事です。

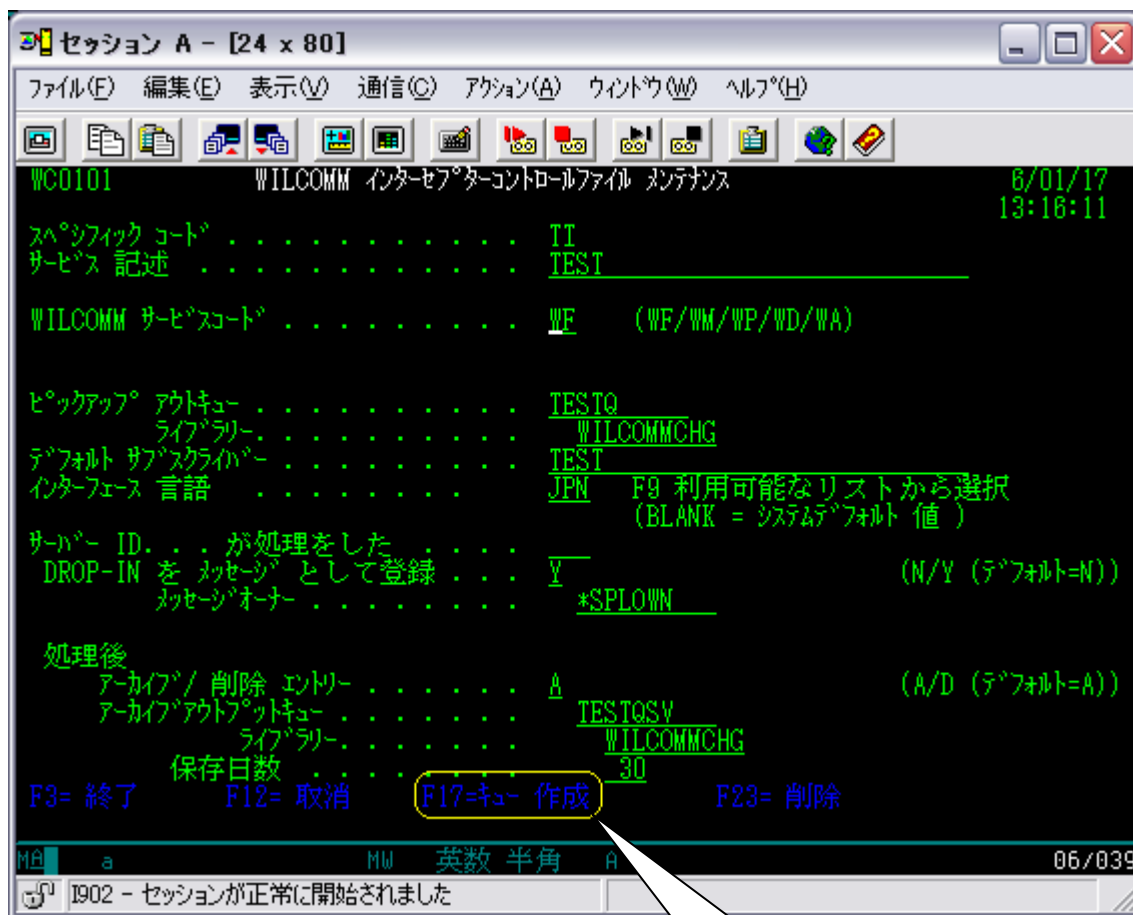
このコードは **UNIQUE** なコードを指定してください。

スペシフィックコードの意味は後述します。ここでは、「監視 OUTQ」と1対1の関係にある2桁のコードであるとだけ理解してください。

次の画面が表示されます。



入力項目の詳細は、次ページを参照してください。



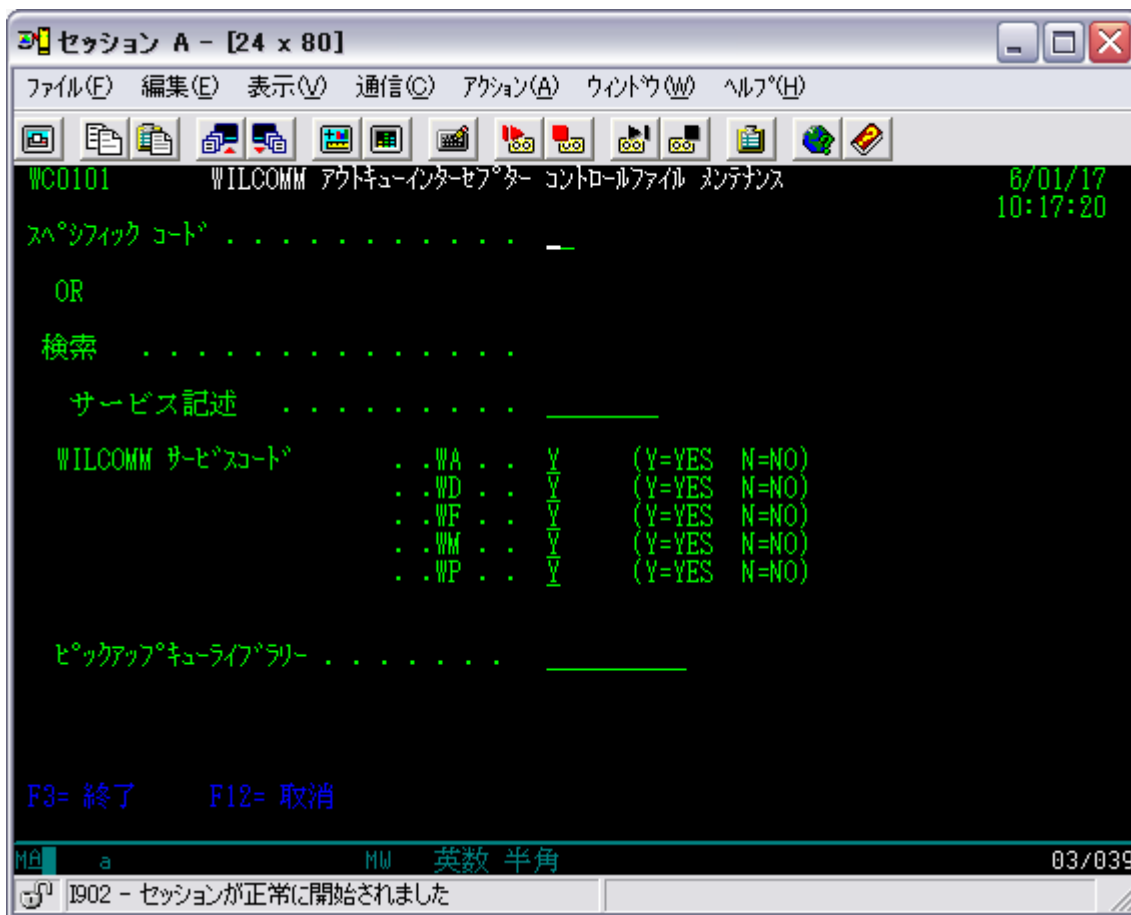
全ての必要項目の入力後、F17 キー
で監視 OUTQ は作成されます。

[画面入力項目とその内容]

画面項目名	内容
サービス記述	入力後、既登録の監視 OUTQ を一覧表示した場合のコメント部。これから作成しようとしている監視 OUTQ の使用目的等を端的に入力することをお勧めします。使用するサブスクライバ名をも入力しておけば、管理しやすくなるかも知れません。但し、始めの1文字目は必ずシングルバイト文字を使用してください。
WILCOMM サービスコード	「サブスクライバー」で指定したサービスコードを入力します。
ピックアップアウトキュー	ここで入力した名称の OUTQ が監視されます。
ライブラリー	OUTQ が存在する（作成する）ライブラリーを指定します。 管理上 WilComm のライブラリー “WILCOMMCHG” を指定することをお勧めします。
デフォルト サブスクライバー	この「監視対象 OUTQ」用に作成した「サブスクライバー」を入力します。
インターフェイス言語	F9 を押して言語を選択します。 *日本語環境の場合は、「JPN」を選択します。
サーバー ID	任意の英数字 3 文字を入力します。(例: SV1) iSeries と PC サーバーが 1 対 1 構成の環境では表示されません。 iSeries と PC サーバーが 1 対 N, N 対 1, N 対 N 構成の場合に表示されます。 *PC サーバーに転送するスプールファイルデータの拡張子となります。監視 OUTQ 単位に PC サーバーをコントロールする場合に有効です。
DROP-IN をメッセージとして登録	送信状況を確認する照会画面（メッセージリスト）での表示の有無を指定します。デフォルト値 ‘N’ は、送信状況の画面照会ができません。配信管理表示するために ‘Y’ を指定することをお勧めします。
メッセージ オーナー	送信状況を確認する照会画面（メッセージリスト）データを作成する場合のオーナーの指定です。メッセージリストはスプールを生成したオーナー単位に表示するのが基本です。つまり自分で処理したものは自分で管理するという原則です。‘*SPLOWN’ を指定することで、スプールを生成した作成者用のメッセージリストが作成されます。 管理上 ‘*SPLOWN’ をお勧めします。
アーカイブ/削除エンター	ピックアップアウトキューで処理したスプールファイルを送信処理後に他の OUTQ で保管するか否かを指定します。 保管するために ‘A’ を指定し、送信処理後のスプールは保管することをお勧めします。

アーカイブアウトプットキュー	処理後のスプールファイルを保管する為の OUTQ 名を入力します。 上記ピックアップアウトキューで入力した OUTQ 名の後に 'SV' (SAVE の意)を付けると管理しやすいかもしれません。
ライブラリー	処理後のスプールファイルを保管する為の OUTQ のライブラリーを指定します。 管理上 WilComm のライブラリー “WILCOMMCHG” を指定することをお勧めします。
保管日数	スプールファイルをアーカイブアウトプットキューで保管する場合の保管日数を指定します。 1~999 まで入力可能で、999 を入力した場合は削除されません。 指定した日数を経過したスプールファイルは、ウィルコムのパージ処理にて自動的に削除されます。

次の画面が表示されたら完了です。



この画面に戻りましたら「監視対象 OUTQ」の作成が完了した事になります。
F3 キーで終了して下さい。

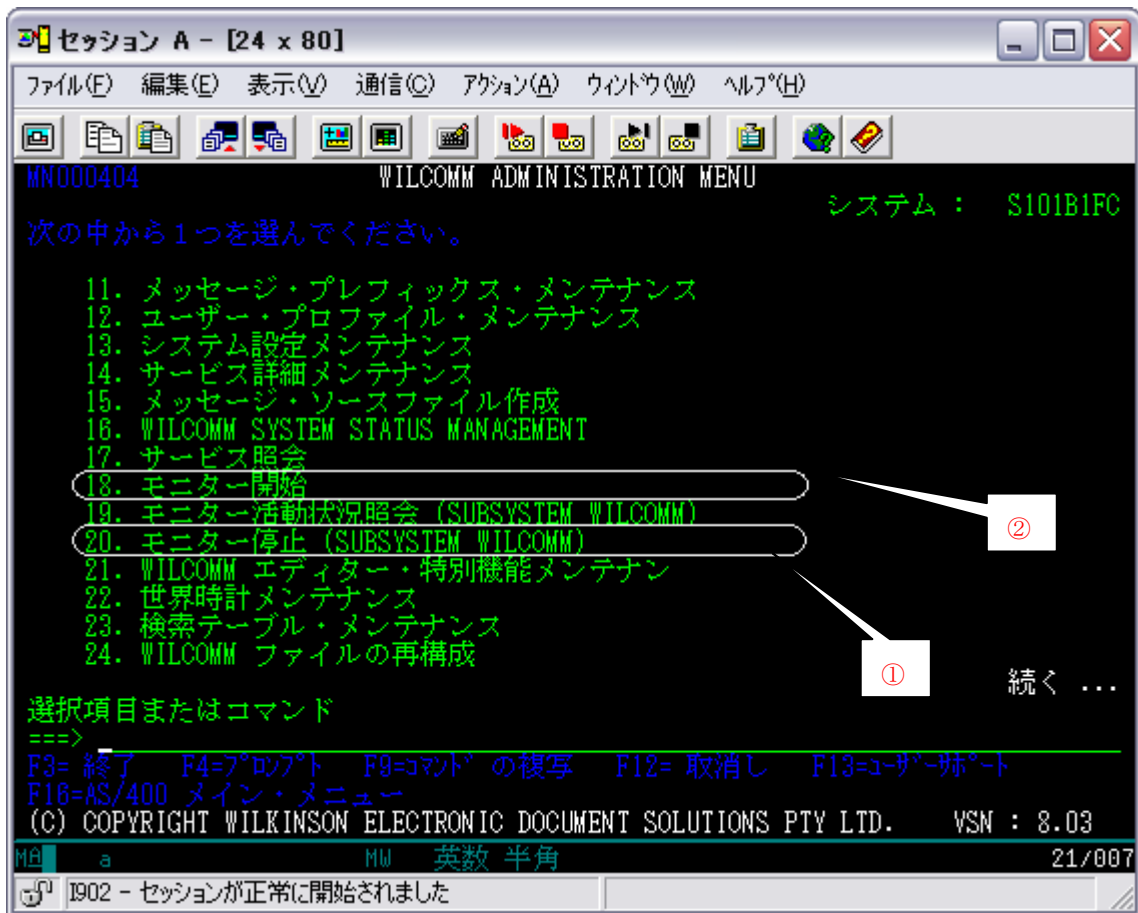
OUTQ : WILCOMMCHG/TEST 及び WILCOMMCHG/TESTQSV が作成されていることを確認してください。

[6. 監視対象OUTQ作成の確認]

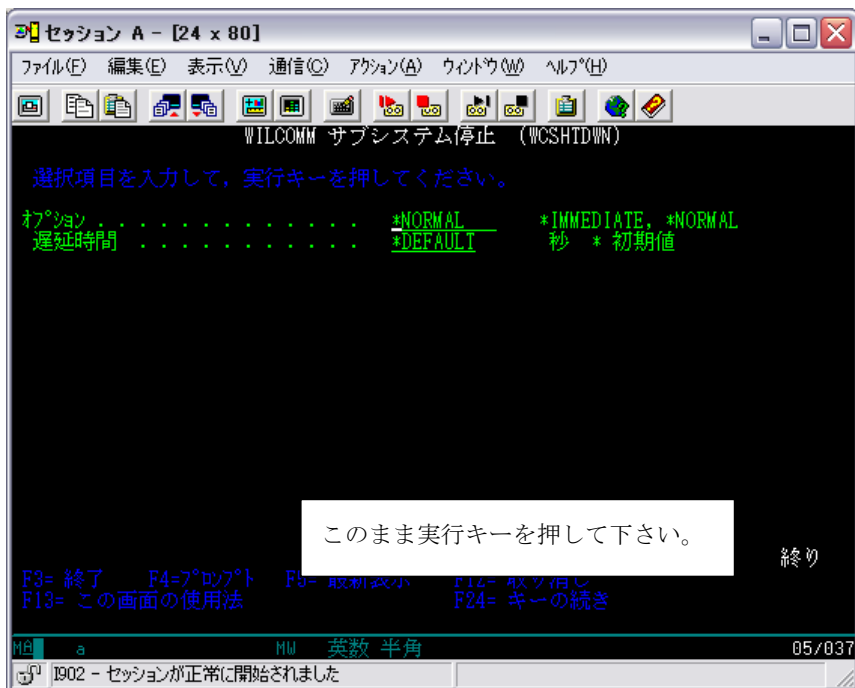
作成した「監視対象OUTQ」を処理可能な状態にする必要が有ります。Wilcomm メインメニューで次 ページキーを押して、次の画面を表示し“60. WILCOMM ADMINISTRATION MENU”を選択します。



①次の画面の“20. モニター停止 (SUBSYSTEM WILPLEX)”を実行し、ウィルコムを一旦停止します。

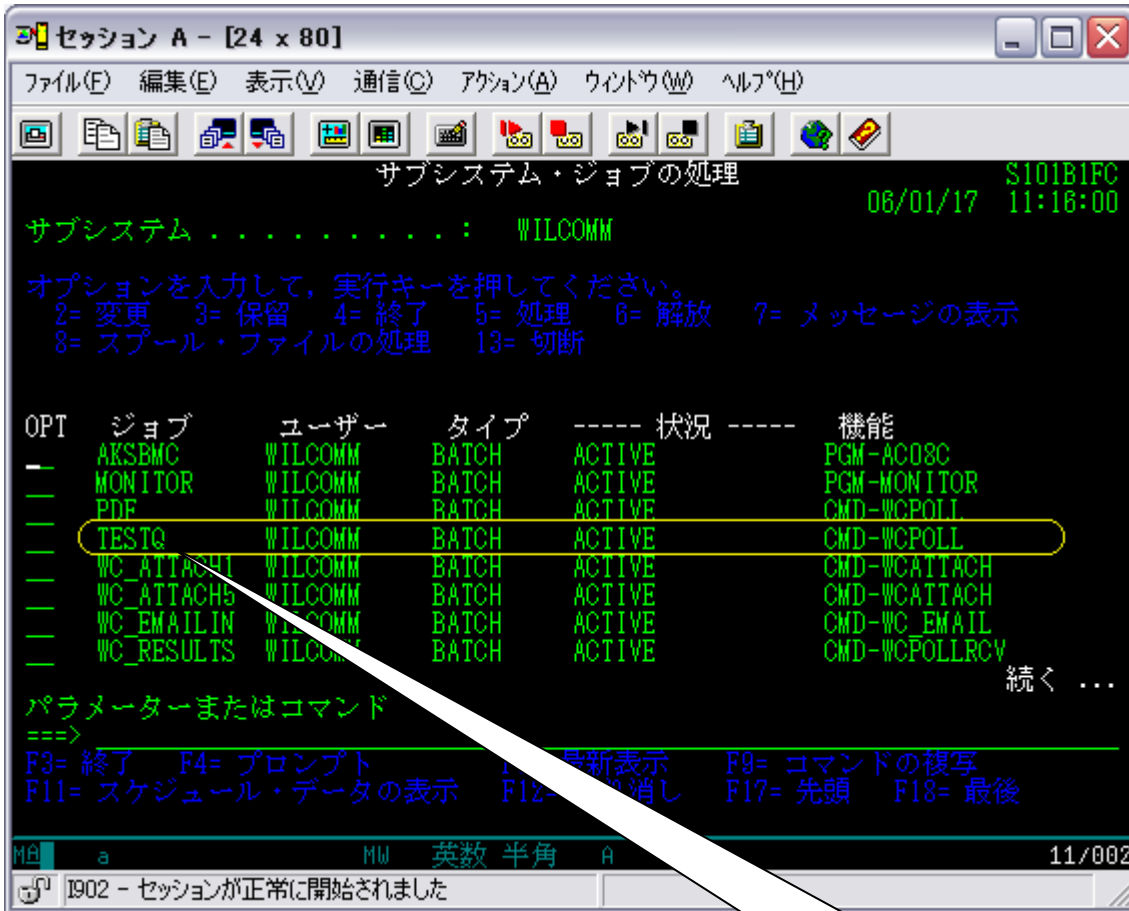


“20. モニター停止 (SUBSYSTEM WILPLEX)”を実行すると、次の画面が表示されます。
必ず、オプション= “*NORMAL”、遅延時間= “*DEFAULT” で実行して下さい。



②停止後、“18. モニター開始”を実行し、再起動します。

“19. モニター活動状況照会 (SUBSYSTEM WILCOMM)” 実行して表示される画面に、作成した「監視対象OUTQ」と同名のジョブが起動していることを確認してください。



監視対象OUTQと同名ジョブの起動が確認できたら、OUTQの作成は正常です。

[7. 監視対象OUTQ動作確認]

ここでは、作成した監視対象OUTQに実際にスプールファイルを投入し、動作が正常であるか否かを確認します。

PC サーバー側のウィルコムは停止した状態にします。

この状態で監視対象OUTQにスプールファイルを投入しますと、PC サーバー側でネットワークドライブとしてiSeries に接続している I ドライブに処理されたスプールファイルが作成されます。

作成されるファイルは、PC サーバー側のウィルコムが起動していると、PC サーバー内に受け取ってしまいますので、ここではあえてPC サーバー側ウィルコムを停止した状態で確認することにします。

作成されたファイルは、「メモ帳」等のテキスト・エディタで開くことができますので、内容についても確認することにしてしましましょう。

①iSeries のコマンドラインで以下を実行します。

DSPLIBL OUTPUT(*PRINT)

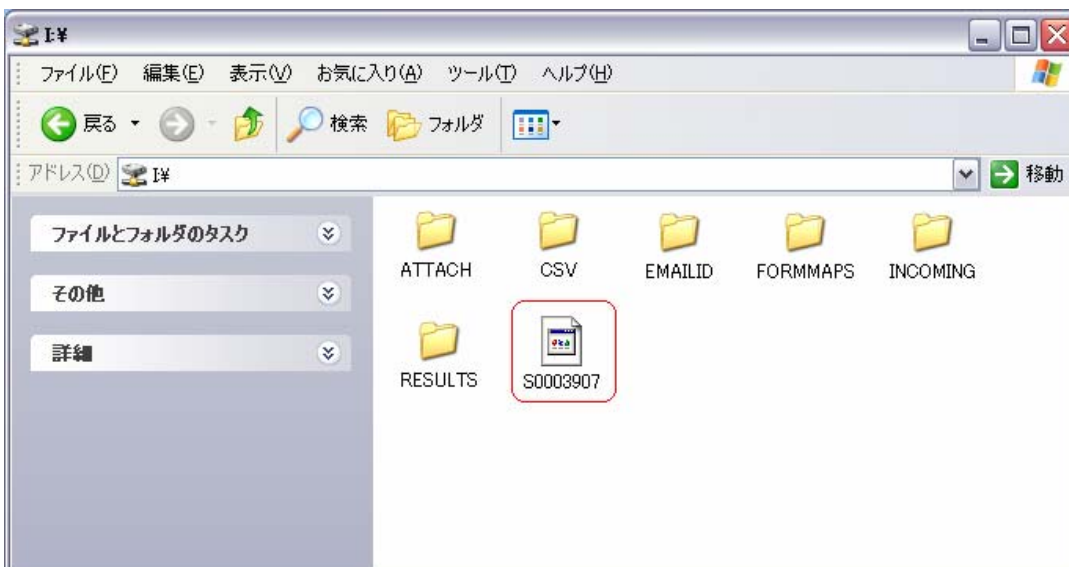
②ライブラリーストが印刷されますので、このスプールファイルを作成しました監視対象OUTQに投入してください。

③WRKOUTQ OUTQ(WILCOMMCHG/TESTQ) を実行して投入したスプールファイルの有無を確認します。

④WRKOUTQ OUTQ(WILCOMMCHG/TESTQSV) を実行して③で処理されたスプールファイルが保管されていることを確認します。

*確認できましたら、iSeries 側の処理は終了したことになります。この時点で PC サーバー側に転送するためのファイルが作成されているはずです。

⑤PC サーバー側から I ドライブを参照します。(Sxxxxxxx のファイルの有無を確認します)



⑥ I ドライブに作成されたファイルをメモ帳等のテキスト・エディタで開いて見ます。

赤枠部 は、監視対象OUTQ : W I L C O M M C H G / T E S T Q の作成時に指定したサブスクライバー : T E S T に指定した宛先です。(ここでは FAX 番号 : 03-123-5678 を指定した例です。) **<ADR1>**

青枠部 は、スプールファイル本体です。 **<DATA>** から **<DATAEND>** まで。

緑枠部 は、スプールファイルの属性項目です。**赤線部** は監視対象OUTQ : W I L C O M M C H G / T E S T Q の作成時に指定したスペシフィック・コードです。 **<ATTRIBUTES>** から **<ATTRIBUTESEND>** まで。

赤枠部及び緑枠部の情報を PC サーバーは受け取ることで、iSeries からどのようなスプールファイルが転送されてきたかを認識することができます。PC サーバー側では、これらの情報をもとに受け取ったスプールファイルをどのような方法 (Mail/FAX/Print/File) で、何処へ配信するか の定義を作成します。(Lesson-4)

Lesson-3 では、iSeries に作成した監視対象OUTQ にスプールファイルを投入すると、上記ファイルが作成されることまでを理解してください。

- Note -